

2023
秀作

第56回「おかねの作文」コンクール

「活きたもの」として付き合う覚悟

京都府・洛南高等学校附属中学校 2年 武中 聖

昨冬のある朝、激怒した母が僕を叩き起こした。「私のICカード、返して！」と。そのカードは、もし僕が定期を忘れてたり紛失したりしたときも困らず電車に乗れるように、と通学カバンのポケットに母が忍ばせていたものだ。それがないと怒っている。緊急時以外は取り出さないことを約束していた手前、沸騰状態にある母に向かってまさか勝手に使ったなんて白状できない。元の位置に戻したはずなのに、という僕の自信のない記憶とは対照的に、母は「5月29日の日曜日にJR難波駅の券売機で5,000円チャージした」とはっきり記憶している。どう取り繕えばいいだろうと思いつらしているうちに、母はカードの利用停止手続きと利用履歴確認のために、カスタマーセンターに電話をかけはじめた。その瞬間、全てがバレてしまう恐怖から僕は固まり顔面蒼白に。寿命が縮んだ気がした。

今、僕は支払いのほとんどに電子マネーを使う。コンビニでもカフェでも、スマホだけ持っていれば事足りてしまう。この夏、自販機でQRコード決済をして飲み物を手にしたときには、ちょっと感動した。電子マネー決済ができる場所がどんどん増えている昨今、スマホとICカード（僕の場合は、そこに定期もついている）さえあれば、ある程度までの外出は可能。さらに僕の電子マネーの残額は母が管理しているため、残額不足が発生することも、まずない。しかし、この状況が当たり前になっていたことで、僕は「お金は無くなることはない」といつの間にか錯覚していた。お金の価値を自覚しないどころか、モノとして捉えることもできなくなっていた。

先のICカード事故が、僕の錯覚を覚醒させるきっかけとなった。母はまず、僕が落としたであろうそのカードが、拾った人に不正利用されていないかを確認。第三者利用は無いことを確認したら、カードを利用停止にして再発行手続き。だがこの時点では「よかった、再発行できるんだ」程度の認識で、僕はまだ事

の重大さに気づかず。その後、母が現時点でのカード残額や出入金履歴を事細かに確認しはじめた途端、冷や汗が噴き出た。僕は、券売機での「クイックチャージ」の仕組みをきちんと理解せず、単純に使ったらチャージ、を繰り返していたのだ。そのお金がどこから来ているのか、全く気にもせずに。

まもなく、僕が勝手に出入金し使用した総額は、1万6,000円にもなると判明した。母だけでなく、祖父母にもものすごく怒られた。僕の失くしたICカードは券売機に置いてボタンを押せば無限にチャージできる「魔法のカード」ではなかったのだ。母のクレジットカードとひも付けされているそのカードは、券売機でチャージするときに現金を入れる必要はない。希望金額のボタンを押せば、母のクレジットカードで決済完了。スマート故、暗証番号の入力も不要。ということは、そのICカードを手にした人は誰でもいくらでもチャージ可能、それこそ見知らぬ誰かにとっては、いとも簡単に悪用できる魔法のカードとなってしまうのだ。ここでやっと、僕は母との約束を破ったことを悔やんだ。そして軽率すぎた自分の行為を恥じ、深く反省した。

自分の意識の低さが招いた不慮の事故。ICカードやQRコードで決済した場合には何時何分にどこで買い物をしたという履歴が全て残ることを知った僕は、一瞬、自由を奪われたような感覚に襲われた。だが冷静に考えてみると、今回はそれで救われたのも事実。もし今でも「無限に使える魔法のカード」と錯覚したまま母のICカードでちょっとだけちょっとだけと思ってピッピッピ買い物を続けていたとしたら、と考えると怖くなる。1万6,000円どころでは終わらない金額になっていたかもしれない。自分の過失を正当化するようで嫌だが、僕のお年玉から返済し、ゴメンナサイで許されるような状況ではなくなっていたかもしれないと考えると怖すぎる。

お金は、対価としての価値を持つもの。モノを買うとき、サービスを受けるとき、提示される金額に対して支払う側が「それだけの価値がある」と納得した場合に初めて交換が成立する。その交換を成立させるためには、モノやサービスの実態や市場相場を知ること不可欠。だが、まだ自分の力で「お金を稼ぐ」ことができない僕にとってもっと重要なのは、不自由なくモノが手に入りサービスを受けられる環境に暮らせているのはなぜか、を常に考えること。欲しいものは何でも簡単に手に入る、誰かに許可をもらわなくてもピッとすれば買え

てしまう、は大間違い。便利さの裏には、いつも課題が待ち受けている。お金を稼ぐことができない半面で無自覚になるのであれば、スマホやカードの中の「見えないお金」と付き合う資格はない。見えないお金と付き合うためには、不自由な生活に感謝し、便利さの背景を正確に理解することが必要。有形無形に関わらず「活きたもの」としてのお金と付き合っていく覚悟は必携。

